
NARUTO転生モノ。

不思議の国のミク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO転生モノ。

【Zコード】

Z7533Z

【作者名】

不思議の国のミク

【あらすじ】

ツバサ転生モノ。の主人公アリスさんが、NARUTOにいったら。という妄想小説です。

といっても、プロローグからすべてやり直しますが。容姿、能力などは、次元移動と、運などは変わりますが、後は変わりません。ツバサと同じように駄文になると思いますが、おねがいします。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

プロローグ

「う・・・ん・・・?」

田覚めるとこつもとは全く違う場所。

田の前には幼女さんがいる・・・。

まあ、それはどうでもいいことじ「どうでもいへないですよーー」で、
といふえず、夢だか「無視ですかーー無視するんですかーー?」らも
う寝てしまいまじゅう。

「おねがいしますーー!反応してくださーー!もつなこやひこまやか
ーー!」

えーっと、あ、床がちゅうと固いですが、寝れますね。よし寝まし
よ「本当に願いしますーー!反応してくださーー!反応してくれな
かつたらもう本当にになりますよーー!」

「あーーもうーー!うるさいこといたのこ、元のうれしさをひいていたのこ、な
にじてくれぢゅうひるんですか。」

「私ーー?私が悪いんですかーー?」

「あたりまえじやないですか。いいから寝かせてくださいよ。」

「いや、おねがいしますー本当にーー!話だけでも聞いてくださいよ。」

・・・しかたないな。

「で、話はなんですか。」

「よひやく聞く氣になつてくれましたか・・・それでは話ます。あなたは私のせいでしんてしま・・・「よし。寝よひ。」いえ！！本当にんです！寝る準備しないでください！！！」

「ここに生きてこらじやないですか。いい加減にしてくださいよ。

「いえ、あなたは私のせいでしんでしまいました。」

「一応信じて見る」とこじります。で、あなたは誰なんですか。」

「私ですか？フッフッフッ。聞いて驚いてください！・わたしはかよし。寝よう、うん。」ああああつすみませんっ！・すみません！・もひふざけないので聞いてくださいといいい「」

「もう一度聞きます。あなたは誰ですか。」

「私は神です。」

「頭が逝かれていますか。大丈夫です。私の近くにある精神科のお医者さんはとてもやせしい方なのでやさしくしてくれま「お願いします！・本当にお願ひします！！話を聞いてください！！話を聞いてくれないと神の座から天使に下ろされてしまうんです！！」・・・はあ、分かりました。少しの間しゃべらないので、その間にはなしてください。」

「ふう・・・では、もう一度いいます。私は神です。でも、まだまだ新米なので、仕事にあまり慣れていませんでした。なので、この

前に、机の上の書類を床にぶちまけてしまつて・・・で、書類を取つていたら、運悪く書類を踏みやぶいてしまいました。その紙があなたのことが書かれている紙だつた・・・といつわけです。

「ふうん。一応信じる」とこじれます

「有難うござります。それで、あなたを殺してしまつたお詫びとうわけで、転生＆チート能力を渡そう、とおもつたので、呼び出させていただきました」

「そうですか。わかりました。因みにもとの世界には「できないです・・・すみません」なんですか？」

「死者が元の世界に戻るために、一度善行を行つていた方は、天国に。悪い事をしていた方は、地獄に。ということになつています。そこで、5年間天国では、魂を休めます。地獄では、分かると思いますが、今まで行つた罪を地獄で苦しんできます。ですが、軽い罪だと、半年くらいで天国にいけます。ですが、普通の寿命よりも早く死んでしまつた場合、元の世界にもどれなくなつてしまふんです。天国にも、地獄にもいけないので・・・」

「ふうん。それじゃあどこにいくのですか」

「はい。あなたには、この中のどれか一つをえらんでいただきます。

」

そういうて紙がだされた。

えつと・・・

魔術と科学がある世界。

ある学園での世界。

心を使って銃を撃つ世界。

忍者がいる世界。

魔法少女がいる世界。

えっと。

多分、1はとある魔術の世界ですよね。

2は・・・予想がつきませんが、平和な世界のようですね。
3は多分テガミバチですね。

4は忍者ですからNARUTOですね。

5は・・・リリカルなのはか、まだかの世界でしょうか。

1は上条さんの不幸が悪化しそうなので、却下。

2はチート能力くれるのに、まず平和ということで却下。
3は下手したら心とかなくしそうなので却下。

4は結構刺激があつて面白そうで、ナルトにもあつてみたいし。候補
5は魔法少女とか興味ないので却下。

となると4番ですね。

「4番でお願いします」

「わかりました。それでは能力を5つだけいくつください。殺しちやつたの私ですし。

少々無理なものでもかなえます」

「それでは・・・

1つ目はテガミバチのマカの能力（髪の毛を剣に変える・身体能力）ですね。

2つ目はとある魔術の禁書目録の超能力全般、レベル5で使えるようにしてほしいです。

3つ目は、やっぱりチャクラを九尾の10倍くらいで、超能力をチャ克拉で代用するようにお願ひします。

4つ目はうちは一族に生まれるようにしてお願ひします。でも、万華鏡車輪眼は、5歳のときに開眼するようにお願ひします。

5つ目はやっぱり、原作加入できるようにお願ひします。後は・・・ないですね」

「チャクラ九尾の10倍って・・・結構きつい事いいますね。でも。不可能ではないのがんばってみます。」

パチンシ

神様が指パチンするとパソコンが出てきました。

「（カタカタカタカタ）・・・よしつ。なんとかできました。それでは、第2の人生をお楽しみください。」

すると、田の前が暗くなってきた。

「あ。神様。私のわがままでありが・・・と・・・」

う

そのまま意識を失つた。

プロローグ（後書き）

プロローグです。

誤字脱字があればお願いします。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

主人公設定

名前 うちは アリス

容姿 テガミバチのニッチよりも3?低い。
髪の毛は茶髪、目は金色、手は普通。

体重 聞いたつてほぼ意味がないほど軽い。
敵に軽く投げられただけで2?飛ぶ。

性格 自分からは攻撃しない。でも相手が攻撃したら
攻撃を開始する。はつきり言って冷血

能力 とある魔術の禁書目録の超能力を
すべてレバ5で使える
テガミバチのマカの能力身体能力は修行して、
3倍になっている。
チャクラが九尾の5倍となっている。

とりあえず今はこうなっています。

話が増えていくことに、多くなると思います。

主人公設定（後書き）

誤字脱字など報告お願いします。

1話 アリスの誕生？（前書き）

1話
です。

1話 アリスの誕生？

「んにちは、アリスです。

生まれて間もないころに捨てられました。

なぜでしょう。

それは、自分のチャクラが膨大にあつたから。

チャクラが多いのがダメでしたね・・・

そしてマダラさんに拾われました。

まさかの晩に入りましたよ。

原作加入したいといつてもこういう形で入りたくはなかつたですね・
・・。

まあ、別にいいですが。

ゼツさんから「うと、木の葉に入つて九尾の監視をして、報告する、
だそうです。

まあ、こういう立場もいいかもしれませんね。

暁の中で、5年たつた後に、万華鏡写輪眼が開眼しました。

マダラさんとかペインさんとかに驚かれましたね。

まあ、暁の本部に住むわけにはいかないので今実際一人暮らしをしていますからね。

6歳になつたときにイタチさんが暁に入つてきました。

イタチさんに驚かれたけど、「サスケを頼む」つていつてきましたし。

サスケさんも監視して、イタチさんに報告しています。

ちなみに今アカデミーで授業している途中です。

マ力の能力のせいが、記憶力がいいらしいですね。

テガミバチの二ッチも200年以上前のこと、覚えてるつて言いますし。

まあそこら辺はおいといて、

いまナルトさんがいるか先生に怒られていますね。

火影の顔岩に落書きをしたとか・・・

ちなみに成績は中くらいでどどめています。

たまに一度で成功したり。などですね。

修行するときは結界はつています。

理由は簡単です。そのときに報告とかしたり、普通の修行法（つてもガイ先生でも全くできないくらいハードな修行）など、あまり見られたくないですからね。

超能力とか、マカの能力で、剣にしたり、武器作ったりなど。

みられたら、火影さんに聞かれそうですし。

あ、ナルトさんがイルカ先生に口答えして、変化の術のテストをすることになりました。

まあ、楽勝なので、一発合格にしちゃいますか。

あ、ナルトさんの番ですね。

「変化！…」

ボンッ

「イルカせんせえ～」

とかいいながらウインク。

はつきり言つて気持ち悪いですね。

あ、イルカ先生が鼻血だしてたおれました。

「バカモノ！…変な術作つてないで、術の練習でもしてろー…！」

あー、怒られますねー。

まあ、関係ないですが。

あ、次私ですね。

「変化」

ポンッ

普通に火影さんに似てるよつに変化しました。

「よし、いいぞ」

うん。疑われていないです。

そりやつてどんどん次にいつてつて、終わりました。

あ、今日の授業おわりました。

もつ帰りましょうか。

ん? サスケさん?

サスケさんなら結構つまごくらいで終わらせましたね。

はつきり言つてサスケさん。迷惑なことしますからね。

先生がこの術しますよー、とかいつてお手本見せてる途中で、やつてともいってないのにやつて、成功させてますからね。

先生からにじりまわれますよー。

ちなみにナルトは、サスケのマネして、失敗しておわりましたね。

ナルトはチャクラの練り方が駄目だから、失敗するだけですからね。

こんじ教えましょーつか？

いや・・・ダメですね。

あまり原作を壊したくないので、Cランク任務のときにやらること
しますか。

そうしたら中忍試験の時にあまり負担がかかりませんしね。

個人的にはイタチさん死んでほしくないので、とりあえずサスケが
大蛇丸に呪印つけられないようにしますか。

イタチさんは弟思いのいい人ですからね・・・。

そんな人が死んでしまうなんてもつたいないので。

とりあえず、あまりイタチさんに負担かけない様にしますか。

あ、もうこんな時間ですね。

とつあえず寝ます。

今気づいたことが一つ。

身長が一ツチよりも低いです。

まあ、7班にはいれるとは原作加入能力で、わかりますが。

タズナさんにバカにされそうですね。

まあ、どうでもいいですか。

寝ましょう。

1話 アリスの誕生？（後書き）

誤字、脱字など報告おねがいします。

アトバイスや感想もお待ちしております。

2話 アカトリー卒業試験。（前書き）

この先どうぞ。

2話 アカデミー卒業試験。

「んにちは、アリスです。

今日は、アカデミー卒業試験とかいうやつですね。

もちろん、課題は分身の術ですが。

ナ「げえええっ！俺の苦手な術だつてばよ・・・」

うん。ここも原作どおりですね。

それについて、これ終わったら報告ですか。

その後は自由行動つていわれてますし・・・

ま、ここはマズキの傍観でもしますか。

あ、サスケさんが出てきましたね。

そつこねばこの試験つてランダムなんですよ。

なんというか・・・くじであたつた人から呼ばれて、そのままいくつて感じですね。

まあ、あまり何番目でも別にいいですけど。

サスケさんが先にしても、結果額当てをみれば、合格したか分かりますし。

後でも、少しまつてれば分かることがありますから。

ナルトさんは、原作がおつ失敗するはずですから。

特にきにしなくても、大丈夫でしょう。

「次ッ！アリス！」

あ、呼ばれましたね。

それでは、いってきます。

イ「いつも通りにするんだぞ」

「はい。分かりました」

んーどうでしょう。

一応分身の術は、得意といづキャラで言つてますから・・・

3~6くらいでいいでしょう。

『変化ツー』

ボンッ（煙が出た音）

すると「アリスが5人になつていていた。

イ「よしつー合格だ！」

うん。疑われていなかから、大丈夫だね。

得意だし、5人ぐらいでも普通だとおもつてたんですね。

今の状態で本気だしたら何体であるんでしょう・・・

大体1万はできますよね。軽く。

まあ、早く報告しないと・・・。

額当てもらつて、普通に挨拶つと。

「先生ー！ありがとうございます」とまつたつ

そして満面の作り笑い。

うん。これで演技は完璧ですね。

はあ、それにしてもこのアカデミーのレベルに合わせるつて結構面
倒くせいです。

レベルが低すぎるとです。

もう画面倒くせいってほどじゃないですね。

なんだ行きたくないとももつたか・・・。

早く家に帰つて報告しないと・・・。

あ、サクラさんですか？

サクラさんば、監視対象にもなつていないと、

自分の中では、モブキャラ程度しか思つてしません。

しかもいつも「サスケくううーん！私合格したよおお～」

はい、いりです。

すみません。

はつきりいって邪魔でしかありません。

サクラさんもそうですが、イノさんも同じ感じですし。

はつきりいってどうでもいいですから。

でも同じ班になるのは本当にやめてほしいかな・・・。

なんかネギまーとかでよく見るアンチつていつのをやつてみましょ
うかね・・・。

・・・面倒くせこですかりやめときましおうか。

おひとい、やつこいつの闇にもう家にひこてこました。

わざと報告書かいて、渡しましょうか。

ほどさび誰にも見つからない洞穴があるんですよ。

そこじで報告書を渡してゐるわけですが。

原作の場所と、すぐ近くなので。

早くいかないといけませんね。

結界はつて・・・マカの能力をつかって、鉛筆を5本持ります。

そして報告書を一気に書く!

いつしたら一分ぐらこでもひでせひゅこますからね。

筆跡は私の字と同じですし。

ちなみに能力のことは、暁金圓に話してありますから、驚かれませんし。

で、書き終わったので、わざと報告書を渡してこましうつか。

よし、着きましたね。

早く渡しちゃいましょうか。

結界はつて・・・と。

ゼッゼーん。

ズズズズズズ（壁の壁から出でる音）

（白にまつと黒にまつの前が切れてしまつたので、白と、黒で分けます。）

白「もう終わったのかい？早いね」

黒「テ、報告書ハドゴードル？」

「はい、これです

白「毎回悪いね。ありがと。」

「で、このをイタチさんに渡してくれませんか？」

黒「アア、ワカツタ」

「ありがとうございます。次の報告は何時ですか？」

白「大体中忍試験前くらいのときに報告をお願いするよ」

「わかりました。では」

ズズズズズズ（部屋の壁に戻つていぐ音）

「さて、と。まずは、傍観ですね」

そうつて少しはあるいてから戻ついた。

「もう一えば火影は水晶玉からなんか見てるんですね」

・・・・うだ。

「結界張つて、自分のことを認識できなくしまじょう

言わば、ネギマーでいう、認識障害魔法ですね。

まあ、魔法なんてオカルトなモノでもないですが。

とつあえず、結界はつて・・・

ついでに気配も消して・・・と。

よしつ、傍観にきましょつか。

アリス移動中

うん、いますね。

ミ「・・・・・ま・・・・・た！・・・・・なんだよ…」

ああつ、少し遅かつたですね。

まあいいです。

ちょっとくらいおそくでも、大丈夫でしょう。

イ「そうだよなあ・・・さびしかつたんだよなあ・・・・・」

イルカ先生がナルトさんをかばつてますね。

ナ「な、なんで・・・俺なんかを・・・」

「…こちらはつまりないですね…なんか漫画とかでよくある展開ってモノですね。

ちよつとききながして、最後のほうに移動。

少しまつていたらナルトさんとイルカさんがきましたね。

イーカルト：「少し後Nを向いてEをへふしてしN」

お、密室でを、「」でありますね

卷之三

ପାତ୍ରବିଦ୍ୟା ଏବଂ କାନ୍ତିକାଳ

文川口

あ、でも今考えたら、私というイレギュラーが入ったらスリーマンセルじゃなくて、フォーマンセルになりますね。

そこは修正力とやらが働いて、まあ、大丈夫ですね。

「よし、それじゃあ今日は、俺が一楽のラーメン奢りだ！」

ナ「本物だつてばよ! ? やつたー、いつぱい食べるひばよ!」

終わつたみたいですし。戻りましようか。

瞬身の術で家にすぐさま移動。

もう寝ますか・・・。

火「ふむ・・・これはなんじゃ？」

そこにあつたのは、ちょっとぼやけたよつたものが映つていた。

一方。火影のところでは・・・。

元々、認識障害魔法的なものなので、耐性があるならば、少しほみえるようになつてゐる。

なので、少しだけ耐性のあつた火影は、「ううすらりとみえる、ぼやけたようなものに調査をするように忍に頼んだ。

ちなみにこのことをアリスは知らなかつた。

2話 アカデミー卒業試験。（後書き）

2話です。

少しは長くかけたかと思います。

アトバイス、感想、誤字脱字等等。

報告お願いします。

3話 下忍選抜試験 1。（前書き）

3話です。

3話 下忍選抜試験 1。

「んにちは、アリスです。

まだ、私というイレギュラーが入つて、異常とかがまだ起こつてはいません。

このままでなればいいですが・・・。

さて、今日は班発表ですね。

イルカ「いいか、下忍は大抵スリーマンセル3人で任務が行われる」

等と、色々説明をした後に、班発表が。

・・・・・

イルカ「・・・次！6班！・・・！・・・！・・・！」

あ、もうすぐですね。

イルカ「7班！春野サクラー！うちはサスケ！うずまきナルト！それと・・・うちはアリス！」

ざわざわ・・・とし始めましたね。

一応サスケさんは人気ですから、女子からの嫉妬でしょう。

イノ「先生！何で7班は3人じゃなくて、4人なんですか…？」

スリーマンセル

フォーマンセル

やつぱりですね。

ナルト「先生！何でこの優秀な俺が！」んな（サスケさんを指で指す）やつと一緒にしなくちゃいけないんだよーー！」

イルカ「ナルト！お前は失敗ばかりするドベだから成績的に優秀な、サクラとサスケを入れたんだ！それでも、少し足りないくらいだから、少し成績のいいアリスを入れたんだ！！」

サスケ「せいぜい足を引っ張らないでくれよ、ドベ」

ナルト「な、なんだとおおおおーーーーー！」

あーあーあー。喧嘩しちゃつてますよ。

まあ、しゃうがないですよね。

ライバルと、先生にドベっていわれたんですし。

「こいつはとめぬかとめないか・・・。

・・・こいつが、女子からの嫉妬の視線がすくいいたいです。

多分、こいつはといふことと、同じ班といふことでしうね。

あ・・・やついえば。

血口紹介・・・どうしましょー。

あ、班発表もおわった見たいです。

とりあえず、上忍がいるつて場所にいきましょう。

アリス移動中

教室につきました。

はい。カカリ先生遅いです。

気配はしますが・・・大体アカデミーから、5?くらいでしょうか。

はい。今の時刻を知るために、時計見てみましょう。

班発表終わり時刻 10時30分

上忍教室に到着時刻 11時まで

今の時間 1時30分

はい、2時間30分の遅刻です。

あ、ナルトさんが立ち上がりつて・・・

ナルト「ニシシシシシッ」

サクラ「ちょっとー何やつてるのよー!」

ナルト「遅れてくるほうが悪いんだつてばよつ!」

サクラ「もう!私知らないから!（内なるサ克拉・私二つのはきなんだよねー!!）」

サスケ「上忍がそんなブービートラップに引っかかるかよ」

サスケさんがフンッと鼻を鳴らして田を他のところに移した。

サクラさん。内なるサ克拉さんが見え見えですよー。

因みに私は、あまり関係のないよう、「体育座りをして顔を下に埋めています

他の人からみたら、寝ているように見えているはず。

あ、カカシさんの気配がかなり近づいてきました。

おそらく扉まで316?ちょうどしじつか。（正確には、316?12?）

カカシさんは少し走りますね。

おそらく残り1分30秒・・・

・・・・・1分・・・・・50・・・・・40・・・・

30・・・・・20・・・・・じゅ「ちょっとヒー・アリスー・おきなさいよー」（サクラの声）・・・・・

高速で頭の中で、アニメ会議しています。

熊「ここのは無視したほうがいいんじゃないのかクマ?」

兎「でも、騒がれるとすゞへいざいんじやないかぴょん?」

狐「ここのは実力こつし「だめだクマノぴょんーー」・・・

犬「それじゃあここのは多数決だワンつ」

熊「無視したほうがいいともおもつ獣はっ！……二十数名だクマ

兎「それじゃあ起きたほうがいいともおもつ獣はっ！……十数名
だぴょん」

狐「ここはやつぱり実力行使で「だめだクマーピヨン！」……
あ、皆手あげたコソ」

兎、熊「ええええええええええええええええええええええええええ
クマーピヨン！…」

兎、熊「狐以外の案できめるクマーピヨン！…だから、無視する
ことによるクマーピヨン！…」

ここまでかかった時間……0.0000001秒にも満たしませ
ん。

とこうことで……無視！

サクラ「ちょっとーーアリスーーきいてんのーー」

無視……無視……無視……無視……。

サクラ「もうー先生きてもしらないからーー」

ニヤツ……いい事思いついた。

先生が来た瞬間にとびだして、切りつけようとするーこれいいです
ね！

もちろん、下忍と分かるくらいの速度で。

先生がいつてきたら、言訳しちゃいましょう。

残り、1メートル……

殺氣はできないとわかつてゐるおもつるので、出しません。

・・といつておけば、大丈夫でしょう。

10センチ……

ガラガラガラッ

今です！

スツ

カキン！（クナイとクナイが合われる音）

カカシ「つたぐ、危ないでしょーが」

ニヤリと作り笑顔を作つて、

「先生がおくれてくるのがわるいんですよ」

お、サスケたちがすゞぎつくりしてゐる。

カカシ「んーまあ、お前達の印象は……嫌いだ……」

ジャンプして・・・ばくてんして・・・椅子にストンッと座る
つと。

・・・・・

す、じく嫌な空氣になりました・・・

まあ、私は悪くないです。

大丈夫でしょう。・・・多分。

3話 下忍選抜試験 1。（後書き）

ちょっととした攻撃シーンをいれてみました。

馴文ですみません。 . . .

4話 下忍選抜試験 2。（前書き）

1日に2回投稿できました。

4話 下忍選抜試験 2。

カカシ「あー。とつあえず・・・・血口紹介をしてもらおう」といいました。

サクラ「先生!何を言えばいいですか?」

カカシ「んーそうだな・・・好きなものに嫌いなもの。将来の夢や趣味などだな」

サクラ「それじゃあ先生が先に自己紹介していく下さい!」

ナルト「やつだつてばよーーすつとまつてたんだつてばよーー」

カカシ「ん?俺か?俺ははたけカカシ。好きなものと嫌いなものはお前らに教える意味ないだろ? 将来の夢つていつてもなあ・・・・趣味は・・・まあ、色々だ。」

サクラさんがサスケさんに「ねえ、結局わかったのって名前だけじゃない?」って耳打ちしてますね。

そういうえばサスケさんはさつきからこっちを睨んでくるんですが・・・あの・・・やめていただけませんか・・・?

カカシ「それじゃあ、そここの金髪君からね」

ナルト「俺さ!俺さ!好きなものはラーメン!もつと好きなものは

イルカ先生におひつてもらつた一樂のラーメン！嫌いなものは、カツラーメンを待つときの3分間！将来の夢は火影になる！！でもつて、里のみんなに俺の存在を認めさせてやるつてばよ……」

カカシはなるほどなあ……といつ表情でうなずく

ナルト「趣味は……悪戯かな」

カカシ「それじゃあ、そこの桃色の髪の女の子」

サクラ「私は春野サクラでえー好きなものはあーいや、好きな人もいつちやおつかなあー」

サクラさんがキャーとかいいながら手で顔を隠してゐ。

サクラ「嫌いなものは、ナルトです……」

ナルトさんが、ガーンという拍音がついてきそうなくらい落ち込んでます。

サクラ「趣味はあ～～」

カカシさんが、ここら辺の女の子は忍よりも、恋なのね……つていうような感じな表情してますね。

カカシ「それじゃあ、そこの「ちは一族の男の子」

サスケ「名は「ちはサスケ。嫌いなものは色々あるが、好きなものは得にない。それと、夢なんかで終わらす気はないが……野望はある……ちは一族の復興と、ある男を必ず……殺すことだ」

カカシさんはやつぱり・・・という表情で何かを考えていますね。

サクラさんはよくわかるとおもいますが、「キャーかつこここーーー」とかいながら皿をハートにしています。

はつきりいいます。気持ち悪いですよ。

カカシ「んじゃあ最後のうつけの女の子」

おっと、私の番ですね。

「私の名前は、うちはアリス。好きなものは、野菜に果物。嫌いなものは、肉ですね。将来の夢はSランク任務を受けるようになることです。趣味は・・・修行ですね。」

普通に、満面の作り笑顔をしながら答える。

「ひじいたら疑われにくいですし。」のほつがみんなと同じような感じですからね。

カカシさんは（これからカカシ先生に変えます）うん。普通だなつとおもっていますね。

ほり・・・ね？

カカシ「よし。自己紹介は終わり、明日から任務をするからな」

2人が少し反応した。まあ、私の将来の夢はSランクって言っちゃいましたし。

とりあえず、作り笑顔を続けていましょう。

カカシ「まずは、俺ら5人でやるサバイバル演習だ」

4人が5人になっていますね。

私が入ったからでしようか?

サクラ「なんで今さら演習なんかするのよー・演習ならアカデミーでさんざんやったわよーー！」

サクラさんが講義する。

カカシ「相手は俺だが、ただの演習じゃない」

サクラ「どんな演習よーー」

カカシ「いや・・・ただな。これ言つたらお前ら絶対引くから」

ですよねー。脱落率66%の演習つていつたら

カカシ「卒業生一十七名中、下忍と認められるのはたった九名。残り十八名はアカデミーに戻される、脱落率66%以上の超難関テストだ！」

三人とも引いてますね。

え? 私ですか?

私はもちろん引いている・ふり・です。

サクラ「卒業試験をやつたじやない！あればなんだつたのよーー。」
カカシ「それは、下忍になる可能性のあるやつを選抜するためだろ？」

カカシ先生はなにいつてんだよ？」こつ。的な田でサクラさんを見る

といつかサクラさんギャーギャー五月蠅いです。

黙るといつか言葉を教えたほうがいいのでしょうか？

カカシ「それで、お前らの合否を決める。忍具はもつてこい。それ
と、朝飯は抜いて来い！・・・・吐くぞ」

最後のほうがなぜか脅迫にみえたんですが、気のせいですか？

カカシ先生は、プリントを配つていぐ。

忍具や、朝飯や、”集合時刻”など。ここ大事！…7時からです！

私は、朝飯を食べてきます。もちろん。

3人とも、それだけきつい事と勘違ひしているようですし。

カカシ「詳しいことはプリントに書いておいたから、皆遅れてこな
いように」

カカシ先生。あなたがそれ、言えることですか？

火影のいる部屋

火影「どうだつたかな？7班は」

カカシ「はい。うちは一族2人に九尾の妖狐、春野家ですね」

カカシ先生と火影のおじいさんが何かを話している。

カカシ「うちは一族のアリスがいきなり攻撃をしかけてきましたよ・・・」

・・・

火影「時間に遅れたから・・・かの?」

カカシ「はい。そのとおりです。それと。うちは一族のサスケはやつぱり、復讐の事をいつていきましたね・・・」

火影「そうか・・・引き続き、たのむぞ」

カカシ「はい、わかりました」

アリス移動中

そうですね・・・明日はお弁当をもっていきましょう。

それに、皆食べていないとおもつので、携帯食料を。

吐いても大丈夫なように、袋を。

・・・と色々準備をしているアリスでした。

ナルト移動中

ナルト「えーと、ここをこうして、こうしてこうだつてばよーー！」

ナルトさんは布団の上で、カカシの絵が書いてある、枕をサンドバックとして

殴り続けていた。

そんなことをしても意味がない。

枕なので、動かないからあたるだけで、本番は殴っても当たらない。

他にも、サスケさんの絵が描いてある枕もあった・・・

サスケ移動中

サスケさんは、そんなナルトさんみたいなバカなことはしないで、出来ないとわかつていても、修行をしていた。

少しでも強くなつたほうがマシだらうとおもつて・・・だとおもつ本當は、イタチさんを超えるためにやつてこるだけかもしてないけど。

サクラ移動中

サクラさんは、まあ、簡単なやつだらうと油断をしていた。

下忍選抜試験なんだから、下忍の私でもできるだらう・・・と。

それで、ナルトは別におちてもいいや、私とサスケくんがあがればいいと、おもっていた。

そりゃえているのは、あがれるわけがないのに・・・。

アリス移動中

アリスは、6時に起きた。

そして、朝ごはんをたべ、弁当を作り、マカの能力で忍具を十分につくつておき、

袋など、色々なものを用意して、

「行つてきます」

と言ひ、集合場所に行つた。

アリスは、カカシ先生が遅れてくることを知っていたため、修行を
しようとしていた。

因みに、アリスが忍具がはいつているポーチを忘れて、家に走つて
帰ってきたのは、秘密です。

4話 下忍選抜試験 2。（後書き）

駄文ですみません・・・

アトバイスや、誤字脱字報告。

感想など、お待ちしています。

5話 下忍選抜試験 3。（前書き）

5話目ですー。

5話 下忍選抜試験 3。

「んにちは、アリスです。

ただ今、修行しながら遅刻魔（カカシ先生）を待っています。

時間に遅れないようにとかいいながら、自分が遅れてるんじゃないですか。

もう少ししたら、他のひとが「カカシ先生遅いってばよ……！」
(ナルトの声)

サクラ「遅れてこないようになつていつたカカシ先生が遅れてるじゃない！？」

ナルトとサクラたちが騒ぎ始めました。

ちなみに今の時間は、10時25分です。

遅刻魔（カカシ先生）が来いといつていた時間は、7時です。

3時間25分の遅刻です。

こんどはどんな奇襲してみましようか・・・。

もう少しづん下忍なみの強さですが。

そういえば、鈴をとるときは、超能力の一部、電撃使い『エレクトロマスター』を使うことにしました。

それだけでも、十分戦えるとおもいますし。

たしか、あの鈴は鉄性だったので、髪に磁力をつけたら取れるとおもいます。

何かときかれたときの言い訳も考へておきましたし。

まあ大丈夫でしょう。

5
分後

力カシ「やあ、諸君。おはよう！」

力カシ「いやあ、黒猫に前を横切られてしまつてねえ。そのままにらみ合いになつてしまつたんだよ」

それで3時間30分も持つのですか。忍者の忍耐力はすごいですね。

といつてゐ間に、力カシ先生は準備を始めた。

力カシ「（カチカチカチ・・・）・・・よし、12時セットOK！」

そういうばここだけOK使つんでしたよね。

チリンッ チリンッ チリリリッ

力カシ「いいか？ここに3つ鈴がある。これからこの鈴を、昼までに俺から奪い取れば合格だ。もし奪えなかつたやつは、昼飯抜きだ！！あの丸太に縛り付けた後で、俺が目の前で食うから」

ギュルルルルッ（腹から音が鳴る音）

3人とも腹の音がなつていますね。皆恥ずかしがつてます。

私は大丈夫です。

3人の音で、私になつたとは誰もおもわないでしょ。

カカシ「鈴は一人1つでいい。だから、1人は丸太行きになるわけだ。で、鈴が取れなかつたやつは、任務失敗つてことで、失格だ。手裏剣は使ってもいいぞ。俺を殺すつもりでこい」

サクラ「でも、危ないわよ！！」

サクラさん・・・下忍が上忍に勝てるとでもおもつてゐるのでしょか・・・

ナルト「そつだつてばよ！危ないつてばよ！」

カカシ「まあ、下忍が上忍に勝てるわけないだろ・・・。ギャーギャー騒いでいる”ドベ”はほつておいて・・・」

そこで、ドベといつ言葉に切れたナルトがクナイを持つて襲い掛かる。・・・が。

カカシ「おいおい・・・まだスタートなんて一言も言つてないだろ？」

といいながら、ナルトのクナイを後頭部のところに持つていく。

ナルトば吃驚して、サスケとサクラは、これが上忍なんだ・・・つてこうよくな顔で見ていますね。

カカシ「ククク・・・ようやく俺のことわかつてくれたか・・・お前らのこと好きななれそつだな。それでは・・・始めー！」

カカシ先生が言つたとき瞬間。

ザンッ

と音を立てて、木の影や、茂みなどに隠れた。

私はとりあえず、気配を消して見えにくい木の上に座る。

力カシ移動中

カカシ「忍者なる者・・・・・・ 気配を消して、隠れるべし・・・・

•

(よし、皆つかれて……)

ナルト「いやー！尋常にしようお~~~~~ぶ！！！」

(なかつたか・・・・・)

田の前に「王立ちしてこらるべ」(ナルト)に立つた。

カカシ「お前わあ・・・ちと、ズレとるのね・・・」

ナルト「ズレてるのはお前の髪型のセンスだらおーーー」

はあっ。 とため息がでる。

このとき、サクラとサスケは「あの馬鹿・・・」とつぶやいていた。

アリスは「ううん、とつなずいて、原作じおつだ。と嘘じていた。

アリス移動中

カカシ「ま・・・とりあえず、『忍戦術の心得 その一』・・・体術を教えてやる」

といいながら、ポーチに手を触れ、中から何かを取り出しつとした。

それにきづいたナルトは、後に後退した。

カカシ「いい判断だ」

といいながら、本を取り出した。

ナルトはなぜ本を取り出したわからない感じ。

カカシ「どうした？ 掛かつてこないのか？」

挑発するように言つ。

ナルト「いや・・・なんで本なんか？」

カカシ「ああ・・・これ？ 大丈夫だ。お前等相手だつたら読んでも
読まなくとも平気だから」

ナルトは一瞬考え込むようにして、意味がわかつたようで、

ナルト「・・・ぶつ殺す・・・」

きれた。

ナルトは、カカシに飛び掛るが、カカシは殆ど動かないで防いでいく。

無造作に放つたキックやパンチが手や、かわされたりして虚空をきる。

そうしてやつていると、いきなりカカシ先生が消えた。

ナルト「・・・？ありや？」

カカシ「忍者が何度も後ろを取られるな。馬鹿」

呆然としながらキヨロキヨロしていると、後ろから声がした。

ナルトが、後ろを向いていたが。

カカシ「遅い」

サクラ「ナルト！避けなさい！！」

カカシ先生が作っている印に気づいたサクラが、

ナルトに助言をするが・・・

カカシ「木の葉秘伝体術奥義！！千年殺し！！」

カカシはナルトに浣腸をした。

ナルト「んぎゃああああああ！」

といいながら、湖に落ちていった。

サクラとサスケはただの浣腸に脱力していた。

アリスはここら辺どうだつていいから、早く終わらないかな・・・
とおもいながら、もうちょっと改良して、カカシ先生を倒そうかと
考えていた。

その後は、原作どおり、サクラは幻術にかけられて、サスケは地面に埋められた。

カカシ「最後はアリスか・・・仕掛けでこないのか?」

カカシが歩き回つてゐるときに、目の前にアリスが降りてきた。

「あれ? カカシ先生。 サクラとサスケは終わつたんですか?」

分かつてゐるけど聞く。

カカシ「ん? ああ、終わつたぞ」

「それじゃあ、私だけだといふ」とですね

そして、ニヤリと笑い

「ああ、始めましょうか」

と笑いながら言つた。

5話 下忍選抜試験 3。（後書き）

中途半端で終わってすみません。

5話でした。

6話 下忍選抜試験 4。（前書き）

6話です。

6話 下忍選抜試験 4。

「んにちは、アリスです。

ただ今カカシ先生に始めましょと宣戦布告しました。

ということじで、構えないとそのまま立っています。

はっきりいって構えたほうが、うまいいくんですねよ。

構えたときに、他の方向にいきたかったらその分遅れるじゃないですか。

カカシ先生が少し睨んでいる時に、少しポーチをあさります。

カカシ先生が構えました。

そして走つてこっちにきました

でも、途中で止まりました。

カカシ先生「砂鉄か」

「よく分かりましたね、そのまま走つてたら穴あきになつてくれたのに・・・」

今、磁力をつかつて私の周りに砂鉄をちりばめています。

一定の距離で反発して、そこに物体が押してきてもどうなるか

計算したので、そのままはしつてきたり穴あきにじてくれるところ、簡単な原理です。

あ、先生がクナイを投げてきました。

でも、磁力を使って、ちょうどにことひにおいて、弾きます。

その間もポーチをあわいります。

・・・あ、ありました。

取り出したのは、手にはめる、チャクラを流して使へ、爪のような武器。

それを手につけ、つと。

「行きます」

そつこいつてから、中忍の中くらこのスピードで追い詰めます。

砂鉄はむちゅんすべて地面に落ちてこます。

砂鉄はどこにでもありますから、結構楽に使えるんですね。電撃使い『エレクトロマスター』は。

キンッ！キンッ！ギギギッ！

武器がぶつかつたり、こすれたりする音が響きます。

そして、3分ほどやりあつた後に、髪に磁力を流します。

そして、鈴の近くに髪をもつて、一気にだして、1つ盗りました。

そして後ろに一回転して、スタッフと立ちます。

そして一言。

「私の勝ちですね」

髪についた鈴をチリーンツツと鳴らしながら取ります。

カカシ「実力を隠していたのか？」

カカシ先生はなるほどね・・・って感じの顔をしながら聞いてきました。

「だつてそのほうが楽しそうじやないですか」

面白そうな作り笑いを浮かべながらいつ。

「この鈴は返しますね」

と、こつて鈴を返した後に、

「先に弁当食べて待っていますから」

と、一言いながら、移動します。

そのとき「ジリココココココ...」と音がしました。

とつあえず、瞬身の術で早く移動して、お弁当を食べ始めます。

ナルトさんたちは早くこないかな・・・

アリス移動中

弁当をたべていると、サスケさんとサクラさんがきました。

ナルトさんは丸太に縛られています。

原作どおり、盗み食いをしようとしたらしいですね。

サクラ「アリス！何であんたは弁当を食べているのよー。」

サクラさんがなんか言つて来ましたが無視します。

カカシ「まあ、そのことについては説明するから」

瞬身でカカシ先生がきました。

カカシ「まーとにかく、だ。お前等はアカ^ガテミーに戻る必要もないな」

サクラさんとサスケさんとナルトさんは何を勘違いしているんだか喜んでます。

といつてもサスケさんは、当たり前だ・・つていうような感じでフンッと、鼻を鳴らしだけですが。

内なるサクラ（私、何もしてないけど・・・愛は勝つ！しゃーんな

るー！）

ナルト「じゃあさーじゃあさー！俺等全員・・・」

カカシ「そうだ。3人とも・・・忍者をやめろーー！」

3人が驚愕した顔になる

サクラ「えーなんですよーそれに3人ともつてどうこうとー?」

カカシ「どいつもこいつも忍者になる資格がない餓鬼だつていうことだよ」

ナルト「それじゃあ合格の1人つてだれだつてばよーもしかして・・・」

カカシ「それはアリスに決まってるだろ?」

サスケさんがより悔しがつてますね。同じくちは一族なのに負けたといふことでしょうか。

サクラ「なんでアリスだけ合格なのよー」

カカシ「お前等はこの試験のことについて全くわかつてはいない!アリスは分かつてるかもしけないが・・・それに、一人で俺から鈴も奪つたしな・・・ま、お前等よりは忍者によっぽど向いているって言つことだよ」

キレたサスケさんがカカシ先生に走つて襲い掛かりましたが、

カカシ先生に押さえつけられてしましました。

サクラ「サスケくんを踏むなんてダメえーーー」

カカシ「お前等なめてんのか?ああー?」

カカシ先生も怒り出したでしょうか。

カカシ「「J」の試験の目的を語ります。アリス、分かるか？」

「はい、分かりますよ」

サクラ「え？ じゃあさ？ 鈴がなくても合格できたって「J」とー？」

「もうですよ？」

私がいふと、サスケさんは視線をカカシ先生に移しました。

ナルトさんは、肩を落としましたね。

サクラさんは怒っていますね。

「J」の試験の目的は”チームワーク”でしょ？ カカシ先生

カカシ「そうだ、正解だ」

サクラ「なんで鈴が3個しかないのに、チームワークなわけ！？ 4人で鈴を取つたとしても、1人は必ず脱落になるじゃない！ それだと、チームワークどころか、仲間割れよ！！」

サクラが講義しましたが、カカシ先生は、

カカシ「当たり前だ！ これはわざとチームワークを崩すために仕組んだ試験だからだ！ それなのに、お前等といったら・・・」

一息ためて、

カカシ「ナルト！ お前はただ一人で我武者羅に独走するだけ！ サク

「うー！お前は、どこにいるかもわからない、サスケを探して探し回っているだけ！サスケ！お前は、仲間3人をただ、足手まといときめつけて個人プレーをするだけ！任務は3人で行う！」この班は4人だが・・・」

サクラさんが、アリスはどうなのよ！とか言っています。

「それは、皆の性格的に考えて、やつてくれる可能性は低いと判断したからです。それに、もう鈴は私どりましたし」

カカシ「そのとおり、だ。チームワークを乱すプレイは仲間を危機に陥れことになる。たとえばだ！」

チャキッと音を立てて、サスケさんの首の横にクナイを置きました。

カカシ「サクラ！ナルトを殺せ！さもなくば、サスケが死ぬぞ！..」

と、言いながらサクラさんを脅しています。

サクラは、本当に殺そうかとおもっていますね。

カカシ「と、仲間を人質に取られた挙句、無理な選択を迫られ、殺される。お前等は、そういう世界に入ろうとしているんだぞ！..」

と言つたら、石碑のところまで歩いていきました。

カカシ「この石碑に書かれている人達は、皆『英雄』と、呼ばれている忍者達だ」

と言つたら、ナルトさんが反応しました

カカシ「だが、ただの英雄ではない」

ナルト「どんな英雄なんだってばよ！」

力力シ「任務中、殉職した英雄達だ」

というと、ナルトさんが何もいえなくなつてしまつた。

カカシ「ここには、俺の親友の名も刻まれていて」

そうなるとナルトはちょっと落ち込む。

カカシ「最後にもう一度チャンスをやる・・・挑戦したいやつだけ弁当を食え！ただし！ナルトには食わせるな！」

ナルト「エエ！？」

力カシ「ルールを破つて食べようとした罰だ！食べさせようとしたやつは、失格にするからな。ここでは俺がルールだ！・・・わかつたな」

最後に下忍でも分かる程度の殺氣を送つた。

私? 私はもう合格しているし、弁当を食べ終わっています。

ナルト「へ・・・・へつへーんだ!俺は別に弁当なんて食わなくたつ

て・・・

といいつた後に、ギュルルルルツと音がしました。

「仕方がないですね、はい。どうぞ」

私は、自分で作ってきた弁当を渡す。

サスケ「ほらよ」

サスケさんも、弁当を出しています。

サクラ「ちょっとーアリス！先生は・・・って、サスケくんも！？」

「私のは大丈夫ですよ、家で作ってきたものですし」

サスケ「大丈夫だ。今は力カシの気配はない。・・・昼からは、4人で鈴を取りに行く」

サクラ「そうこう」とじや・・・ああ、もつづ・・・

一瞬考え込んでから、自分の弁当をナルトさんに差し出す。

自分の中で、サクラさんに対する意識がモブさんから、他人に代わりました。

よかつたですね。サクラさん。あがりましたよ。

ナルト「へへへ・・・有難うつてばよ」

といいながら、弁当を食べようとする。

だけど、

ボンツ

カカシ「お前等ああああああああああああああああ！」

ナルトさんとか、サスケさんとかが、驚いている。

サケハなんば井中一之にてありますね。

私はそのお読み用紙を用意してあります。

カガシ・合槌---

すごい笑顔で言つてきました。

6話 下忍選抜試験 4。（後書き）

中途半端でおわってすみません。

やつぱり戦闘描[ク]は難しいですね。

8話でした。

7話 下忍選抜試験 5。（前書き）

総合PVアクセス7490 ユニークアクセス1336 お気に入り登録9件になりました。

有難うござります。

7話です。

7話 下忍選抜試験 5。

ナルト「え？・・・合格！？なんでもってばよー。」

カカシ「お前等が始めてだ。今までは、俺の言つことだけを聞いているボンクラばかりだったからな」

まあ、普通そなりますよねー。

上忍の言つことが正しいとかおもっちゃう人いますからね。

カカシ「忍者は裏の裏を読め。捷を破るものは、クズ呼ばわりされる」

カカシ「けどな、仲間を大切にしないやつはそれ以上のクズだ！..」
わお。私の聞いたかった台詞第6位ができました！

カカシ先生が言つた後に、意味が分かつてきただのか喜びの表情が出てきました。

カカシ「これにて、第7班演習終了！全員合格！！明日から任務開始だ！！」

ビシッ！つて音を立てて、カカシ先生が親指を立てた。

ナルト「やつたつてばよー！忍者！忍者！..忍者！..！」

まあ、ナルトは喜びますよね。火影への第一歩を踏み出したつて所

です。

カカシ「よし、帰るぞ」

サクラさんは、しゃーんなる！つていいながら歩いて、サスケさんは、フンッと、鼻を鳴らしながら帰りました。

私は残ります。

理由は・・・

ナルト「つて……うううつオチだとおもつたつてばよ……繩ぼじけええええ……」

つてなるからです。

クナイでパシッと、縄を切りました。

ナルト「お、ありがとうつてばよ！アリス！」

そのまま走つていきました。

私もそのまま帰りました。

カカシ移動中

(アリスは実力を隠していたのか・・・)

カカシは、やうおもいながら火影のいる部屋に歩いていった。

(それにしても、性質変化までつかえるとは・・・)

アリスの強さに関して、考えていた。

髪に出ていた電氣を、性質変化とももつていた。

実際は違つんだが。

(まあ、難にせよ、火影様に報告しなくては・・・)

火影の部屋についたカカシは、火影にそのことを話した。

火影は、アリスを監視するように、カカシに頼んだ。

実は、これがアリスの作戦だとは知らずに。

アリス移動中

演習がおわったアリスは、今日の報告書を書いていた。

結界を張つて、わからないよつこ。

なるべく、行事があつたときは報告書を書くようにしている。

忘れることはまずないが、書いたほうが楽だといふ。

報告書を書き終わったアリスは、買い物に出かけた。

そして、偶然を装つたカカシ先生に会つた。

カカシ「よお。アリスト

「こにちは、カカシ先生」

カカシ先生の気配があつたことは、アリスは知つていた。

でも、そこでいうと、もつと怪しまれてしまつので、まだ怪しまれたくはないので言わなかつた。

そして、他愛のない話をしていたら、アリスの強さについてカカシ先生が聞いてきた。

カカシ「アリスは、趣味が修行と言っていたがどんなことをしているんだ？」

「そうですね……走りこみとか、チャクラ性質についてとか……」

カカシ「とにかく、チャクラ性質についてとか……

「はい、そうですよ？」

本当は、性質変化ではないのだが、嘘をついた。

後から言つたほうが、危険度を高くすることが出来るため、今は嘘をついて誤魔化しておこうとしたのだった。

その後も、カカシ先生がアリスの強さについてせりげなく聞いてきた。アリスは、嘘を交えながら、質問に答えていった。

一通り聞き終えると、カカシ先生は、別れていった。

アリスは、そのまま買い物を終わらせ家に帰つていた。

家についたら、もうすでに6時だつたため、夕食の準備に取り掛かった。

そしてそのまま食べ終わつたら、整理などをして、寝た。

7話 下忍選抜試験 5。（後書き）

すつじい中途半端に終わってすみません・・・

7話でした。

誤字脱字報告お願いします。

8話 波の国護衛任務 1。（前書き）

8話です。

1日2話投稿できました。

8話 波の国護衛任務 1。

7班の下忍選抜試験が終わってから早2週間

ただ今犬の散歩をしています。

ナルト「うおー！こらー！俺の言つことをけつてばよーー！」

ナルトさんはかっこつけたがって、大きい犬を選びました。

こつちは、小さい犬ですが。

サスケさんも、中の上くらいの犬を選びました。

サクラさんは、少し小さいくらいの犬を選びました。

ナルトさん以外の犬は安定していますが、ナルトさんは犬に振り回されてぱっかりです。

他にも色々な任務がありました。

子守をしたら、ナルトさんが担当している赤ちゃんが泣き出したり。

芋ほりをしたら、ナルトさんが転んでドロだらけになったり。

ほとんどナルトさん以外に被害はでていませんが、ナルトさんは災難続きですね。

で、犬の散歩が終わったので、とりあえず火影様に報告に行きました。

た。

火影「えー、カカシが率いる7班の今日の任務は・・・隣町へのお使いに・・・大名様のペツト『トラ』の搜索＆保護、じゃな・・・」

ナルト「ダメえ――！そんなのノーサンキュッ――！オレってばもつとスゲエー！任務がしたいんだってばよ！――！」

サスケさんは一里あるな・・・といつのような表情を浮かべている。

サクラさんは何言つてるのよ！馬鹿！・・・と、ナルトさんを怒鳴りつけている。

そういうえば、トラの搜索は2日前にやつたばかりじゃないですか・・・。ヒアリスは他の事を考えていた。

カカシ先生は、そろそろ言つていいだとおもつた・・・といつのような表情を浮かべていた。

イルカ「コラ――！――ナルト――！――お前はまだペーペーの新米だろ？が！――誰でも最初は簡単な任務なんだぞ！」

イルカ先生がナルトさんに言つ。

ナルト「だつて！――の前からずっとシヨボイ任務ばかりじゃん！――！」

火影「ナルト・・・お前には任務がどうこうとかを説明する必要があるな」

そういうつて、火影は任務の説明を始めた。

任務は、D・C・B・A・S（弱い　　強い）があつて、里には子守りから、暗殺までの任務が入つてくる。

下忍はD・Cのランクが適切で、中忍がC・Bのランクが適切、上忍がB・Aのランクが適切だといふ。

ただし、Uランクは、暗部や上忍などの経験がある忍者に任されている。

といふことだといふ。

ナルト「あーあーーー！オレってばもう火影のじつちゃんやイルカセンセーがおもつていてるようなイタズラ小僧じやねえーーんだぞ！！」

フンッと鼻を鳴らしてそっぽを向いたナルト。

火影はそつか・・・とおもいながらこいつった

火影「お前がそこまでいうのなら・・・しかたない特別にCランク任務を授けよう。ある人の護衛じや」
(それに・・・アリスのこと)とも調べられるしな・・・)

ナルト「誰！？誰！？もしかして、いいトコのおじょーをまとか！」

？」

火影「そつあわてるな・・・今から紹介する。・・・入つてもらえますかな？」

火影がそういうと扉から依頼人が入ってきた。

リュックを背負つて、鉢巻をして酒を飲んでいるおじさんだった。

？？「なんだあ？超ガキばつかじやねえか！特にそこちつこいアホずら！お前、それでも本当に忍者かあ！？」

ナルト「あはは～誰だ？一番ちっこいのつて」

背を比べをした。

私が一番小さかった・・・

といつあえず、端で体育すわりをして落ち込んでいた。

？？「ああ、ちなみにオレンジ色の髪のほうだから、そこちつこいアホじやねえぞ？」

ナルト「！ぶつ殺す！」

少し立ち直った。

見ると、力力シ先生がナルトさんを抑えてた。

サクラさんは、ナルトを怒鳴りつけていた。

サスケさんは、フンッと、鼻を鳴らして、視線を他のところに移していた。

依頼人の名前は、タズナといふらしい。

タズナ「おい・・・本当にこんな班で大丈夫なんだろうな・・・？」

カカシ「ははは・・・上忍の私がいますから大丈夫ですよ・・・」

タズナさんは、カカシ先生に聞くが、カカシ先生は乾いた笑みを浮かべている。

タズナ「わしは橋作りの超名人、タズナというもんじゃ。わしが国に帰つて橋を完成させるまでの間、超護衛してもらうぞ！」

自己紹介を終えたタズナさんは、酒をまた飲み始めた。

そのまま、準備をするために皆はそれぞれ家に帰つて、明日の出発の用意をした。

イルカ「あいつら・・・大丈夫でしょうか・・・」

火影「うむ・・・上忍のカカシがついているから大丈夫だとはおもうんじやが・・・」

6人が行つた後に不安が出てきた2人だった。

次の日、準備を終えた4人が集合場所に集まつたが、カカシ先生はまだきていなかつた。

その1時間後に力カシ先生は到着した。

力カシ「いやあ、諸君。おはよー！」

ナルト&サクラ「おっそー—————！」

力カシ「まあまあ、今日は道に迷ってしまって・・・」

サクラ「はい、嘘！」

力カシ先生の嘘をあつさり見破ったサクラさん。

タズナ「本当に大丈夫なんだろうな・・・？」

また不安がこみ上げてきたタズナさんだった。

8話 波の国護衛任務 1。（後書き）

中途半端でおわってすみません。

8話でした。

9話 波の国護衛任務 2。（前書き）

1日休んでしまってすみません。

9話です。

9話 波の国護衛任務 2。

カカシ「ははは・・・上忍の私がついてるので、『』心配なく・・・」

そういうカカシ先生も一時間も遅れてきてるので、説得力がなかった。

タズナ「本当か・・・？」

ですよねー。心配ですよねー。

カカシ「さて、行きますか」

カカシ先生がいつと、皆が歩き出した。

そして、『あん』とかかれた扉を抜け、道を走るいた。

サクラ「タズナさん、タズナさんがすんでいるところって、波の国でじょう?」

タズナ「ああ、そうだが?」

サクラさんのがタズナさんに聞くと、こんどはカカシ先生に振った

サクラ「カカシ先生、波の国にも忍者はいるの?」

カカシ「いや、波の国に忍者はいないな」

そういうと、里や忍者について話した。

大抵の他の国には文化や風習など違うが、隠れ里が存在して忍者がいて、その中でも『木の葉』、『霧』、『雲』、『砂』、『岩』は忍び大国とも呼ばれている、で、里の長が『影』の名を語れるのもその五力国だけだそうで、その火影、水影、雷影、風影、土影のいわゆる五影は全世界各国の何万といふ忍者の頂点に君臨する忍者のようです。

サクラ「へー、火影様つてす」こんだあー（内なるサクラ・あの爺がそうなのか？）

明らかに違つ」と考えています(̄)という表情をしています。

カカシ「・・・お前ら、火影様のこと疑つたろ？」

すると、サスケさん以外がビクツと、反応して汗をだらだらとかいていた。

そういう反応したら、隠せてないですよ・・・。

カカシ「ま、安心しin。Jランク任務で、忍者同士の戦いなんかしないから」

サクラ「んじゃあ、外国からの忍者の接触はないんだ・・・よかつたあ。」

カカシ「もちろんんだよ。そうだったら戦死者が多くなるだろ?」

・・・おや? Jランク任務になつてしませんか?

まあいいでしょう・・。

そのとき、タズナさんの表情がちょっと強張ったのを見た。

カカシ先生をみると、何かを考え込んでいた。

5分後

しばらくあるじてると、水溜りがあった。

サスケはあまり考えずにそのまま過ぎていった

サクラは気にもとめずそのままサスケさんに寄つて行つた

カカシ先生は、わかつていながらわかつていらない振りをしてそのまま過ぎていった。

ちなみに私は、自分が作った靴で水溜りをわざとで、しかも強く踏みつけた。

カカシ先生は驚いた表情をつくった。

サスケさんは、チラッとみただけで、あまり気にしなかった

サクラさんは、もう!何やつてるのよーと言つて、しきりにかづ

いてきた。

そして、カカシ先生に向かつて、作り笑顔をした。

そして、少しほなれたときにあの2人が飛び出してきた。

? ? 「 」一匹田 」

といつて、爪をカカシ先生に向けて・・・・・つてあれ?

私に向かつてる?

あ、さつき踏みつけたから、それの仕返しとかそういうつやつでしょ
うか。

しかも、頭が少し大きくなっていますし。

そうですね・・・カカシ先生のように、幻術つかいますか。

巻きつかれる瞬間に幻術を使って、カカシ先生にギリギリで解ける
くらいの幻術をはる。

そして、一瞬で変わり身の術を使い、草むらに隠れる。

幻術は、出来るだけグロく見せた。

まず、上下がブチッと、ちぎれて首もちぎれて、内臓がグシャツと、
飛び出すように見せた。

サクラ「アリストッ!!」

ナルト「う、うわあああああ！！」

サスケ「！？」

それぞれの反応を見せてくれました。

サクラ「ツ！タズナさん！私の後ろに！！」

自分で中で、サクラさんへの対象意識が”他人”から、”知り合い”にかわりました。

よかつたですね。サクラさん。

そして、その2人はカカシ先生のほうに行つた。

？？」「一匹目」

そして、鎖をカカシ先生に巻きつけてまたブシュッとグロくなるよう、カカシ先生が幻術をかけました。

？？」「二匹目」

その次に、ナルトさんのほうに行きました。

ですが、サスケさんに倒されました。

ナルトさんは悔しそうにしていました。

カカシ「サスケ、ナイスだ。」

といいながら、茂みから出てきました。

ナルト「カカシ先生…生きていたってばよ…？」

そうですね。私も出ますか。

「カカシ先生、幻術グロくみせすぎですよ」

と、私がでたら、カカシ先生以外皆すゞく驚いた表情で見ていた。

カカシ「いや、どうみてもあなたの方がグロいでしょーが」

「え？ そうですか？」

サクラ「アリスも生きていたのね・・・」

・・・なんですかその微妙そうな顔は。

もしかして、私がいなかつたらサスケさんを独り占めできるとでもおもっていたんでしょうか・・・。

私は別にサスケさんに好意を持っているわけではないですよ・・・。

カカシ「それと、サクラ、お前もその行動はナイスだ・・・それにしても、ナルトがそんなにも動けないとは・・・」

まあ、しょうがないですよね。

実戦経験はほとんどないですし、相手も殺氣を放っていたわけですし。

ちなみに、あの殺氣だった普通の下忍は「うまくい」けないですよ。

サスケさんや、サクラさんがほんの少し耐性があつただけと、優等生だから大丈夫だったとかそういうことですからね。

カカシ「ナルト、」この爪には毒が塗つてある、あまり動くな毒が回るぞ」

そうカカシ先生がいふと、ナルトさんは、悔しそうに顔を歪めた。

カカシ「タズナさん」

タズナ「な、何じゃ？」

カカシ「少しお話があります」

カカシ「こいつらは、額宛てからして霧隠れの中忍・・・、霧隠れと言えばいかなる犠牲を払つても戦い続けることで知られる忍者だ」

「？」「・・・何故俺達の動きを見切れた」

「それは何日も雨が降つていないので、水溜りはあるわけないじゃないですか。後、わざと踏みつけました、謝罪します、すみませんでした」

カカシに聞かれたのを、アリスが返した。

相手は、敵に謝られるとはおもつていらないらしく驚いていた。

カカシ「ま、そういうことだ」

タズナ「あんた・・・何故それを知つていて、ガキにやらせた?」

カカシ「ま、俺がその気になればこいつ等なんて簡単に瞬殺できますし、それに知る必要が会つたんですよ、こいつらがのターゲットが誰であるのかを・・・」

タズナ「どうこいつ」とだ?「

カカシ先生のいってることが理解できていないのか、カカシ先生に聞く。

カカシ「つまり、狙われているのはあなたなのか・・・それとも、我々忍者のうちのどれかなのか・・・ということですよ」

9話 波の国護衛任務 2。（後書き）

すつしょく中途半端でおわってすみません。

敬語になつていないとこは、アリスがおもつたことではないということです。

駄文、失礼しました。

駄文失礼しました、が口癖になつてゐるような気がします・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7533z/>

NARUTO転生モノ。

2012年1月1日21時45分発行